

民主主義への道程 2000年タンザニア総選挙報告

著者	根本 利通
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2001-03
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008330

民主主義への道程

2000年タンザニア総選挙報告

根本利通

1 総選挙の実施

2000年10月29日、複数政党制によるタンザニアの2回目の総選挙が行われた。前回1995年の選挙は、複数政党制になって初めてという新鮮さと、有力挑戦者の存在もあって、かなり熱気のこもったイベントだったし、日本人を含めた在留外国人が家族を海外に避難させるといった予防手段を取るほど、予測不能の部分もあったが、今回は全般的に「無風」で、何か起こるとすればザンジバルくらいという前評判で推移した。

「無風」となった背景はいろいろ考えられるが、まず大統領選挙が前回と全く同じ4名の顔ぶれになったことが挙げられよう。与党革命党 (CCM) の候補は現職大統領のB・ムカパであった。彼の後ろ盾であったニエレレ初代大統領が1999年10月に死去した際、ムカパの党内基盤の弱さが指摘され、マリチェラ元首相らの古参幹部や、キクウェツテ外相ら若手の挑戦がささやかれた。しかし結果として、党内指名選挙での挑戦はなく、すんなりムカパがCCMの候補に決まり、そうなる全国組織を持つ政権与党の悠然たる選挙運動となった。

今回と前回の大統領選挙結果を掲げる (表1参照)。投票率は選挙人登録者数の84.4%と発表されている (前回は76.7%)。登録者数は約1,009万人で、前回より約13%増加している。しかし、未登録の数も多いので、実際には有権者年齢層の50%ほどの投票率と推定される。

ムカパ大統領は国民的人気が高いというわけではない。第一期5年間の任期中は無難にこなしてきたという印象で、特に国民受けを狙った事業もないし、質朴な風采でカリスマ的な人気が高まる要素はない。その割にはすんなりいったのは、個人的に政敵が少なく、また不正蓄財の噂を聞かないというマイナス面のなさだろうか。

前回選挙で、「汚職摘発」一点張りで都市部の有権者の期待を集め、有力挑戦者だったムレマ元

表1 大統領選挙結果

氏名 (政党)	2000年		1995年	
	得票数	得票率 (%)	得票数	得票率 (%)
ムカパ (CCM)	5,863,201	71.7	4,026,442	61.8
リブシバ (CUF)	1,329,077	16.3	418,973	6.4
ムレマ (TLP)	637,115	7.8	1,808,616	27.8
チュヨ (UDP)	342,891	4.2	258,734	4.0

(注) ムレマの前の所属政党はNCCR (建設改革国民会議)。
(出所) 選管発表にもとづき筆者作成。

副首相は、今回はほとんど話題にはならなかった。前回は「建設と改革のための国民会議」(NCCR)という有力野党の党首として大統領選に挑み、NCCR自体も都市部ではかなりの得票と議席を占めた。しかし、その後のCCMからの揺さ振りで、M・ニエレレやラムワイといった有力代議士が選挙違反で当選取り消しとされたうえ、その後の党内紛争で多くの離党者が出た(多くはCCMに復党)。最後はNCCR創設者のマランドとムレマの間の確執が表面化し、ムレマは側近を率いてタンザニア労働党(TLP)に移籍してしまった。もともと理念や政策に違いが鮮明ではないタンザニアの諸政党であるから、看板である党首・大統領候補に新鮮さがないと盛り上がらないのも当然と言えよう。

2 国民議会選挙の結果

一方の国会議員選挙はどうだったろうか。まず結果を掲げる(表2参照)。NCCRが分裂の結果、現職議員は全員落選し(マランドも落選)、キリマンジャロ州、マラ州で握っていた議席も、CCM、TLP、民主開発党(CHADEMA)などに奪われた。TLPはキリマンジャロ州ほかでムレマ系列の議席を確保した。統一民主党(UDP)は依然としてシニャンガ地域政党に止まっている。その他の弱小政党だが、TLPがムレマを得て存在を認められたのに対し、他の7党は候補者数も得票数も大幅に減らし、次回選挙まで存続しうるか疑問である。

今回野党の中心となったのは市民統一戦線(CUF)である。ザンジバル地域政党の色が濃かったが、初めて本土で2議席を獲得した。議長のリブンバは前大学教授で人気もあり、特にダルエスサラームでは前回のNCCRに代わって、失業若者

表2 国民議会選挙結果

政 党	2000年		1995年	
	当選者(候補者)	得票率(%)	当選者(候補者)	得票率(%)
CCM	198(227)	65.0	186(232)	59.2
CUF	17(136)	12.7	24(177)	5.0
TLP	4(109)	9.2	0(55)	0.4
CHADEMA	4(58)	4.2	3(156)	6.2
UDP	3(63)	4.5	3(125)	3.3
NCCR	1(89)	3.6	16(196)	21.9
その他	0(133)	0.8	0(391)	3.9
合 計	227(815)		232(1,332)	

(注) (1) 参加政党は前回も今回も13党。

(2) 候補者の死亡などで延期された4選挙区を除く(その後実施され、全区でCCM勝利)。

(出所) 選挙発表にもとづき筆者作成。

層の期待を代弁し、CCMに対する有力対抗馬になったのだが、「目には目を」といった戦闘的なスローガンと、ザンジバル・イスラム色の強さから、広範な支持基盤を持つには至らなかった。

CCMは全国的に得票率を伸ばした。地方では不正の報告もあるが、大勢としては結果に影響しなかったと思われる。全25州のうち、CCMが議席を独占したのは16州(前回は12州)、また野党が40%以上の得票率を占め善戦したのは前回は12州あったが、今回は南北ペンバとキリマンジャロ以外にはダルエスサラーム、キゴマ、カゲラ、シニャンガの計7州だけになってしまった。また前回1選挙区もなかった無投票当選が今回は25選挙区もあり、特に前回野党が健闘したアルーシャ州では13選挙区中8選挙区も無投票だったことは、5年前の熱気が大幅に冷めたことをうかがわせる。

3 ザンジバルでの選挙結果

さて今回唯一の焦点として、熱気を維持していたザンジバルのことに触れよう。

タンザニアはタンガニーカとザンジバルとの連

合国家である。ザンジバルには自治政府があり、通貨・外交・国防以外は独立しており、独自の大統領と議会を持っている。この連合が常にタンザニアにとってはアキレス腱で、ザンジバル「分離」を目指す動きは常に伏流しており、折りに触れ危機として現出する。

前回の選挙では与党CCMと野党CUFが激突し、きわめて僅差でCCMが大統領、議会とも制したが、これには開票段階において不正が行われたためと強く信じられている。CUFはその後4年間議会ボイコットを続け、この間CUF議員の投獄や支持者への弾圧は枚挙に暇がない。欧米の援助諸国、特に伝統的援助国の北欧諸国は「明らかな人権侵害」として援助を凍結し、OAUや英連邦が仲介を試みているが、双方とも妥協する姿勢が薄いのは、ザンジバル革命前からの堅い地縁・血縁の結びつきもさることながら、やはりCCM側にすれば権力を手放すことへの恐怖からだろうと想像される。CUF側からすれば、5年間というより革命からの36年間の怨念を込めた雪辱戦であるからだろう。

CUFの大統領候補は今回もセイフ・ハマド元首相であったが、CCM側はサルミン・アムール現大統領が二期10年を終え、出馬できない（憲法改正して3選出馬の動きもあったが、タンザニア全体のCCM会議で否決された）ため、その後継としてアマニ・カルメ運輸通信相を担ぎ出した。カルメはCCMザンジバルの前身アフロシラジ党(ASP)の創設者で、革命後ザンジバル初代大統領となったアベイド・カルメの次男である。カルメは独裁者として君臨し、1972年に暗殺されたが、その名は一方では英雄だがもう一方では悪夢の象徴である。そのカルメの次男を擁立したことは、CCMが前回と同じ戦略（過去の人種対立を思い出させ煽る）に出たことを示している。

波乱を予期させる選挙戦が続いた。ザンジバルの町には大きなカラフルなカルメのポスターが、ビル・商店・個人の住宅までそこかしこに貼られ、CUFのポスターはほとんど目立たなかった。前回はザンジバルでの選挙の2週間後にタンザニア全体の選挙だったが、今回は同日選挙になった。これはタンザニア本土在住のザンジバル人、特にCUFの支持基盤であるペンバ人の里帰り投票を避けるためと言われた。また選挙人登録でもウングジャ島在住のペンバ人の登録が拒否されたり、警察や軍の基地のある選挙区では、本土人の集団登録が噂されていた。

10月29日、どちらの政党も勝利を確信して投票日を迎えたが、予想どおり混乱が起こった。投票箱・用紙の不足という名目で、ザンジバル都市部の投票所が開かれなかったのである。投票所は11～13時ころになってようやく開かれたが、夕方これをCCMの陰謀とするCUF支持の若者のデモに待ち構えたように警官隊が襲いかかり、流血の事態となった。この騒ぎはテレビでも生々しく伝えられた。

当日即刻、ザンジバル50選挙区の内、ザンジバル都市部16選挙区の再選挙が決められた。CUFは全50選挙区の再選挙を主張したが、選管は「金がない」という名目でこれを拒否した。国際監視団は「選管はきわめて無能であるか、または意図的なサボタージュであり、選挙は到底公正とは言えない」という声明を残して引き上げ、CUFは再選挙のボイコットを表明した。

CUFのボイコット表明で、まるで仕組まれたようにCCMの勝利が投票・開票前に決まってしまった。CUFが前回同様ペンバ島全21議席を押さえても、ウングジャ島の議席のうち5議席を奪わない限り過半数は取れないので、決戦場はザンジバル都市部であった。そこをボイコットしてし

まえば、CUFが過半数の議席を獲得することはありえないからである。

CCMはCUFが敗北をごまかすために意図的に再選挙ボイコットに出たと主張する。しかし、CUF側にしてみれば、投票済みの残り34選挙区の投票箱は再選挙終了までの1週間の間選管が保管するわけで、それは完全にCCMの支配下にあることを意味する。票のすり替え・行方不明などがたやすいことだろう。焦点は議会もさることながら大統領選挙だったから、CUFにとってはこれは致命的であった。CUFはボイコットによってその恐れ（というより確実に起こること）を指摘したわけだ。予定どおり1週間後に閉散とした再選挙が行われ、大統領にカルメが当選、議会でもCUFは基盤だったペンバ島の5議席とウングジャ島での3議席を失った。

開票結果を分析するとCCMは二重三重に対策を練っていたことが分かる。ウングジャ島でCUFが前回取ったのは3議席だったが、そのうちのストーンタウンの2議席分の選挙区が合併して1選挙区とされ、CCMの強い郊外に新しい選挙区が作られた。また北部のCUFの拠点ブムブウィニ（Bumbwini）選挙区（これは独立前から反ASPの地盤だった）では5年前に比べて投票総数がほぼ倍増（5551→9138）し、現職のCUF議員も得票を増やした（2634→3166）にもかかわらず、CCM候補はそれ以上に得票を増やした（2517→5885）。

これらはほんの一例で、現地調査をせずにとり新聞報道だけでもそのいかがわしさが分かる。ザンジバルは独立前から政略・陰謀の島だったから、

当たり前のように権力保持を図っただけなのだろう。CCMは「選挙結果をまず認めろ。文句があるなら5年間待て」という態度であり、CUFは議会ボイコットと外国への救済を訴えるという、5年前と同じことの繰り返しである。

選挙後伝えられるだけで9件の爆破事件が起こり、選管やCCM支持者の家が狙われた。CCMはCUFの犯罪として容疑者を大量逮捕（CUFはCCMの陰謀と主張）、ペンバ島からの若者の脱出が始まっている。またCUFは選挙結果の見直しを訴えて、2001年1月27日を期して、ダルエスサラームとザンジバルで大規模なデモを計画したものの、リブンパ議長以下幹部が事前に逮捕されダルエスサラームでは不発に終わったが、ザンジバルでは若者が暴発して、発表だけで22名が警官隊に殺された。野党は相変わらず失業不満層の若者を犠牲にして何の突破口も見出せず、政権与党は強権政治に訴えて安泰のように見える。ザンジバルの今のやり方では、民主主義への道程は見えてこない。

しかしタンザニアの総選挙の直後に起こった超大国・民主主義最先進国の大統領選挙での泥仕合や、日本での政局の反乱と敗北を見てみると、「民主主義」というのはタンザニアが長い道のりをかけて追いかけていくような、理想的かつ高度で上質なものではないのかもしれないと気づかされる。所詮権力争いのパターンの一つで、そこには先進も後進もなく、タンザニアの方がより単純で正直に出てきているだけかもしれないと気休めを感じていることも事実なのだが。

（ねもと・としみち／ダルエスサラーム在住）